

大谷大学図書館所蔵貝葉写本 “*PAÑÑĀSA-JĀTAKA*” と “*Sisora-jātaka*” について

大谷大学には多くの貝葉写本が所蔵されているが、そのうちで *Paññāsa-jātaka*(以下、大谷 *Paññāsa*)の写本が1套収められている。「*Paññāsa-jātaka* は、15～17世紀頃のチェンマイ(北タイの古都)に住んでいたあるタイ僧が、セイロンでパーリ語を学んで帰国した後、前からタイに伝わっていたいくつかのジャータカと称される物語を、パーリ語で編んだものだといわれる」[田辺1980]ものである。PTS からテキストが刊行されているが、PTS は *Zimme Paṇṇāsa* と呼ばれるビルマにおける *Paññāsa-jātaka* の分類を採用しており、大谷 *Paññāsa* とは含まれるタイトルも内容もかなりの相違が見られる。

大谷 *Paññāsa* は phuuk 1-7が欠であるが、[田辺 1981] で前半部分とされるものと大谷 *Paññāsa* の12-18、22-39の部分が一致することから、phuuk 1-7は以下の物語であったと推測される。

1. Samuddaghosa-jātaka
2. Sudhanakumāra-jātaka
3. Sutadhanu-jātaka
4. Ratanapajota-jātaka
5. Sirivipullakitti-jātaka
6. Vipullarāja-jātaka
7. Siricuddhāmaṇi-jātaka
8. Candarāja-jātaka
9. Sumbhamitta-jātaka
10. Siridhara-jātaka
11. Sabbasiddhi-jātaka

大谷 *Paññāsa* は phuuk 8から存在する。各ジャータカの並びかたは [田辺

1981] で前半部分とされるものと一致するので、同じ種類のものと思われる。[] 内は同タイトルの PTS における番号である。伝承の違いから、おおまかな物語はあっているけれども文体は異なる。

phuuk	フォリオ番号	Title
phuuk 8	ṇa r.l.1a~ṇaṃ r.l.5c	12. Dulakapaṇḍita-jātaka [PTS 2] の途中から終りまで
	ṇaṃ r.l.5c~tū r.l.2a	13. Ādita-jātaka [PTS 1]
	tū r.l.2a~	14. Dukammānika-jātaka の途中まで
phuuk 9	~thī r.l.3b	14. Dukammānika-jātaka
	thī r.l.3b~da r.l.3b (thu omit.)	15. Mahāsurasena-jātaka [PTS 28]
	da r.l.3b~	16. Suvaṇṇakumāra-jātaka [PTS 40] の途中まで
phuuk 10	~dhau v.l.1b	16. Suvaṇṇakumāra-jātaka [PTS 40]
	dhau v.l.1b~ni r.l.4c	17. Kanakarāja-jātaka
	ni r.l.4c~naṃ v.l.5c (naḥ omit.)	18. Viriyapaṇḍita-jātaka [PTS 25] の途中まで

phuuk 11は欠であるが、[田辺 1981] から以下の物語であったと推測される。

19. Dhammasoṇḍaka-jātaka
20. Sudassanamahārāja-jātaka
21. Vajjaṅgulirājasuttavaṇṇanā

phuuk	フォリオ番号	Title
phuuk 12	ba r.l.1a~be r.l.4b	22. Piṭakattayakatā tividhasappatti jotana akkhara likkhittaphalavaṇṇanā [PTS 43?] の途中から終りまで
	be r.l.4b~baḥ r.l.4a	23. Dhammikapaṇḍita-jātaka [PTS 8]
	baḥ r.l.4a~bhū r.l.4a	24. Cāgadāna-jātaka [PTS 7]
	bhū r.l.4b~bhau r.l.5b	25. Dhammarāja-jātaka

	bhau r.l.5b～	26. Narajiva-jātaka [PTS 12] の途中まで
phuuk 13	～mū r.l.2b	26. Narajiva-jātaka [PTS 12]
	mū r.l.2b～ya r.l.3c	27. Surūparāja-jātakavaṇṇanā [PTS 14]
	ya r.l.3c～yaḥ v.l.1a	28. Mahāpaduma-jātaka [PTS 27]
	yaḥ v.l.1b～	29. Bhaṇḍātara-jātaka の途中まで
phuuk 14	～lu r.l.4b	29. Bhaṇḍātara-jātaka
	lu r.l.4b～lai v.l.4b	30. Bahalāgāvī-jātaka [PTS 33]
	lai v.l.4b～	31. Setapaṇḍita-jātaka [PTS 30] の途中まで
phuuk 15	～vi v.l.4b	31. Setapaṇḍita-jātaka [PTS 30]
	vi v.l.4b～vaṃ r.l.1a	32. Puppha-jātaka
	vaṃ r.l.1a～sū r.l.4b	33. Bārāṇasirā[ja]-jātaka
	sū r.l.4b～sau v.l.2b	34. Brahmaghosarāja-jātaka [PTS 29]
	sau v.l.2b～	35. Devarukkhakumārajāṭaka paññā-sādhika-samatta の途中まで
phuuk 16	～hū v.l.5a	35. Devarukkhakumārajāṭaka paññā-sādhika-samatta
	hū v.l.5b～lā v.l.5c	36. Salabha-jātaka
	lā v.l.5c～kya r.l.3b	37. Siddhisāra-jātaka [PTS 48]
	kya r.l.3b～kyaḥ r.l.1b	38. Narajivakathina-jātaka
	kyaḥ r.l.1b～khyū v.l.5c	39. Atitedevarāja-jātaka kathinadāna

phuunk の最後に “Tetiṃsajāṭakasamatam” (33ジャータカの終り) と書かれている。33というのは、数が合わない。paññāsādhika-samatta となっている35以降を除いても34の物語が存在する。それから、ジャータカと名の付いてない21もしくは22を除くと33にはなるのだが……。[田辺1981] によるものと違う可能性も残される。他の写本の調査が必要である。

[田辺1981] によると、Paññāsa-jātaka の後半部分とされるものであるが、phuuk の標題が、Paññāsa-jātaka ではなく、Sisora-jātaka になっており、フォリオ番号も ka から始まり、kham で終わっている（普通は khaḥ で終る）。上

記の大谷 Paññāsa のように続けて書かれていないので、〈大谷パリー貝葉〉ではもとの別の種類のものであったかもしれない。

phuuk	フォリオ番号	Title
phuuk 7	ka r.l.1b~khaṃ v.l.5c	Sisora-jātaka

参考文献

Padmanabh S Jaini.

1981 : Paññāsa-jātaka or Zimme Paṇṇāsa Vol. I (in the Burmese Recension).
Pali Text Society, London.

1983 : Paññāsa-jātaka or Zimme Paṇṇāsa Vol. II (in the Burmese Recension).
Pali Text Society, London.

大谷大学図書館

1995 : 『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』大谷大学図書館

田辺和子

1980 : 「Paṇṇāsa-jātaka 中の Sudhana-jātaka について」『印度学仏教学研究』
第28巻第2号 日本印度仏教学会

1981 : 「タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』(50ジャータカ)」『佛教学』
第11号 佛教学研究会

シソーラ・ジャータカ (Sisora-jātaka) 要旨

アナンタ (Ananta) という都にシソーラ (Sisora) という王がおり、王妃はアナンタデーヴィー (Anantadevī) という名であった。王は2頭の馬と強力な四分の軍を備え、その勢力はジャンブ州 (jambūḍipa) 中に並ぶものがなかった。

ある日、王は悪い夢を見た。司祭に夢解きをさせると、犠牲祭 (balikamma) を行わなければ7日後に死が訪れるというものであった。王はその言葉に従わず、死は免れたものの、放浪しなくならなくなった。

その後も王は、色々な人々から誤解を受け、殴られたり、蹴られたりして、一つのところに落ち着くことができず、さらに王であることを証明する品物を取られ、放浪を繰り返し、乞食にまで身を落とした。

その時、アチャラ (Acala) という都にキンヌワッタ (Kinnuvatta) という王がいて、適齢期の娘、スダッタデーヴィー (Sudattadevī) がいつ夫を得るのか

を司祭に占わせた。すると、その結果は貧しい乞食が夫となると出てしまい、キンヌワッタ王は怒り、また、王妃のスッディワティデーヴィー (Suddhivati-deṛ) の言葉を聞きいれて、娘を都の外に追放してしまう。

追放されたスダッタデーヴィーは乞食をしているシソーラ王と出会い、その容姿と食事の取り方が王族のそれであることから、王を連れてきて、聖火堂 (agyāgāra) に住ませた。

そのうち、スダッタデーヴィーが子を産んだ。それを知ったキンヌワッタ王はひどく怒って、その子を殺そうとキンヌワッタ王のところに連れてこさせたが、孫への愛情から殺せなかった。孫を殺せないキンヌワッタ王の憎しみはシソーラ王の方に向けられ、シソーラ王を殺すため、乳母 (dhātī) たちにシソーラ王を見張らせ、過失があれば告げるように命じた。

乳母の密告によって王は捕らえられるが、誤解を解いて、自らの素性も明かす。キンヌワッタ王はそれを聞いて、王であることを証明する品物を回収し、シソーラを王として迎えた。

その後、シソーラ王はアナンタデーヴィーに無事を知らせたところ、アナンタデーヴィーは四分の軍と共にアチャラの都まで赴いた。禍が皆にふりかかることを恐れ、初めは帰る気のなかったシソーラ王も、アナンタデーヴィーの説得によりアナンタ城に帰ることになった。シソーラ王はアナンタデーヴィー・スダッタデーヴィーと共にアナンタ城に帰り、善政を行ったという。

(大上 清：研究協力者：大谷大学大学院修士課程修了)